

北海道遺産 天塩川カヌーツーリング大会



ダウン・ザ・テッシ-オ-ペツ



ダウン・ザ・テッシ-オ-ペツ実行委員会

歴史と自然あふれる天塩川

源を天塩岳に発し、天塩町において日本海に注ぐ北海道第2の大河。

天塩川の名前は、アイヌ語の「テッシ-オ-ペツ / 梁 (やな: 魚を捕る仕掛け) - 多い - 川」が語源で、岩が梁のような形で川を横断していたという地形に由来しており、いまもなお数多く点在している。



恩根内テッシ

カヌーイスト憧れの聖地

天塩川は、ダムや堰堤のない中流の名寄市から河口まで、ノンストップで川下りを楽しめ、今なお多くの自然に恵まれた、日本有数のカヌー適地として知られる。

その区間は157kmと日本最長を誇る。

流域には温泉、川の駅(カヌーポート)、キャンプ場などの施設が充実しており、ロングツーリングには最適条件。



本流の長さ	約256km/全国4位
流域面積	約5,590km ² /全国10位
周辺市町村	2市10町1村
人口	約8万6千人



背景・ねらい

・天塩川でカヌーの普及が広がりを見せないころ、カヤック選手として「はまなす国体」を目指していた現・酒向会長が共感者、サポーターを募るため、1988年手作りの木製カヌーの普及によるカヌー振興を図ろうと「北海道カナディアンカヌークラブ」を結成。自然志向やアウトドアブームが追い風となり、手作りカヌーの普及と共に、次々と天塩川流域市町村にカヌークラブが発足した。

・当時、流域市町村は人口減、高齢化、過疎化が進行する中、新しいまちおこし、まちづくり活動が地方で求められ、地域活性化の糸口を、「開拓の歴史は川から始まった」原点に私たちは求めたのでした。



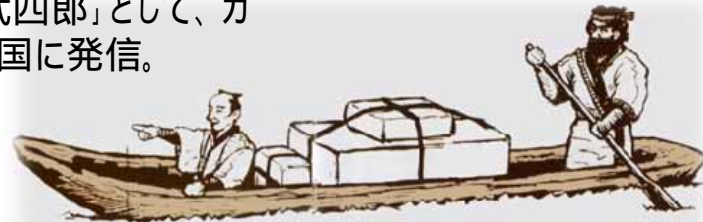
美深町ふるさと館カヌー工房



松浦武四郎 (1818-1888年)

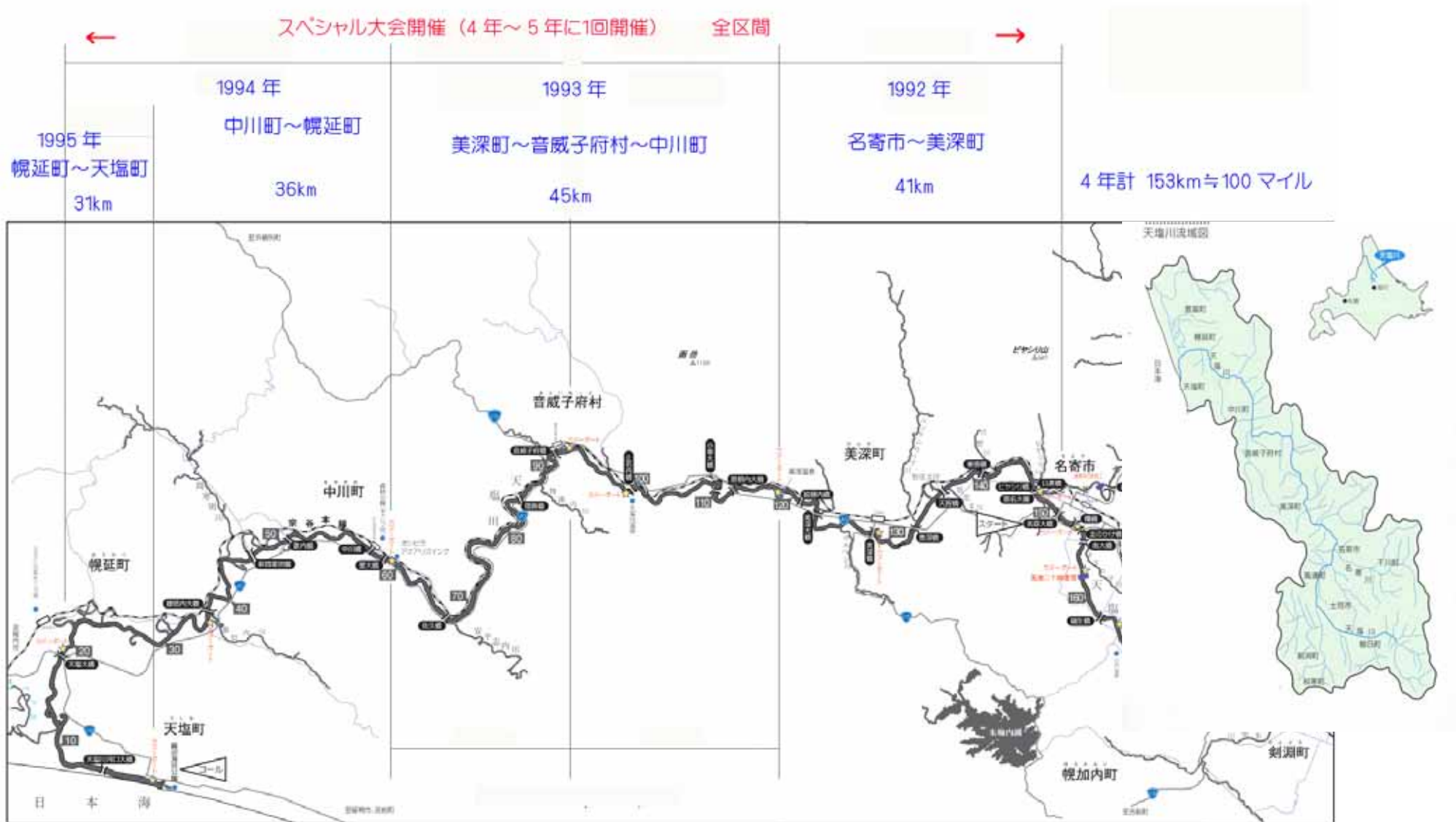
松浦武四郎の天塩川探検

- ・155年前の1857年(安政4年)、江戸幕府の探検家・松浦武四郎が天塩川流域をアイヌ人たちと丸木舟で探査。この記録は『天塩日誌』に記されている。
- ・帰路、天塩川は雨で増水し、一気に名寄、美深、音威子府へと下り、5日間ほどで天塩に戻った。
- ・天塩日誌を学ぶことにより、「現代の武四郎」として、カヌーで新しい天塩川の魅力を発掘し、全国に発信。



1992年 天塩川100マイルカヌーレース構想

*名寄から河口まで100マイルを4ブロックに分け4年間かけて完漕



ダウン・ザ・テッシ-オ-ペツ

・大会名のダウン・ザ・テッシ-オ-ペツ (略称:ダウン・ザ・テッシ) は、天塩川下りという意味の英語とアイヌ語の造語です。

2012年 21回大会開催

・流域カヌークラブの愛好者が「自分たちが参加したい大会を目指し」実行委員会を構成し開催。
・毎年、1泊2日の日程で複数の市町村を40km前後のコースで漕ぎ下る。道内を中心に全国各地から、これまでに延4千人以上が参加した。



2012大会



2011スペシャル大会

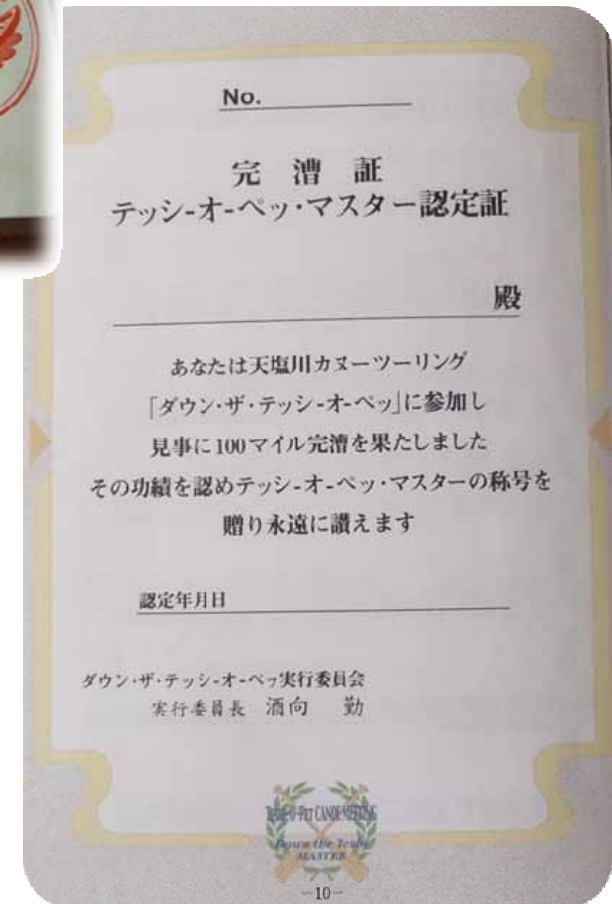
4～5年に1度スペシャル大会開催

・日本最長の100マイル(約160km)を一気に漕ぎ下る天塩川100マイルカヌーツーリング大会をスペシャル大会として4～5年に1度開催。昨年は20回大会を記念して4泊5日かけて3回目のスペシャル大会を開催した。

天塩川100マイル完漕者には、「テッシ・オ・ペツ・マスター」の称号



2006大会では完漕者にマスターパドルが贈られた(天塩町)



テッシ・オ・ペツ・マスターは延423人

スタッフ体制強化しセーフティーカヌーを推進



危険なテッシには誘導スタッフを配置



沈(転覆)に素早くレスキュー



装備点検やレスキュー実技指導も



救急救命講習参加

親水護岸、カヌーポートの有効利用



名寄大橋スタート(名寄市)



びふかアイランドカヌーポート(美深町)



川の駅「天塩川温泉」(音威子府村)



天塩町河川公園(天塩町)

天塩川の歴史や原始の自然をアピール



六郷テッシ(美深町)



北海道の名付け親
松浦武四郎像
(天塩町)



恩根内テッシ(美深町)



北海道命名之地(音威子府村)